

---

# Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

Oka Nieba

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - L u v - 3 r d s t o r y - 世界への介入者

### 【Nコード】

N 4 2 6 8 W

### 【作者名】

O k a N i e b a

### 【あらすじ】

天地無用！に転生したオリ主がある事件をきっかけにM u v - L u vの世界に飛ばされます。

なぜM u v - L u vの世界ではナチス・ドイツが強かったのか。どのようにして世界は構築されたのか。

オルタネイティヴ計画とは何のための計画なのか。

独自解釈モノですので、お気をつけください。

また、武は出ますが、あまり対応がよくありません。

マブラブ主要キャラ等が消される可能性があります。

恋愛要素は…低めになりそうです…。

## 第0話：三命の頂神達の画策（前書き）

こんにちは。

初投稿になります。

よろしく願います。

## 第0話：三命の頂神達の画策

ここは三命の頂神が張った結界内。

誰にも干渉される事はないこの中で、一人の男の処遇について話し合っていた。

——姉者、 ■ ■には我が管理する世界に行ってもらうが構わぬな？

——その次元はどうなっているんだい？

——なに、”所詮”は研究目的に創った世界。 ■ ■が潰しても一向に構わぬぞ。

——はあゝ。あたしは”そんなこと”聞いてるんじゃないんだよ。  
また”Z”みたいのが出てこられても困るって事を言ってるんだ！！

今回は ■ ■を成長させるのが目的なんだよ！  
そもそも今回の件だってあんたが変なちょっかいを出さなきゃこんな事には…

——わ、わかった姉者！わかったから注射器を下げてくれ！！

■ ■が死ぬような所ではない！地球人のいる世界だから大丈夫だ！

本気を出さなくても大丈夫…

というよりも姉者だって遊んでいたくせに、なぜ我だけが悪いのだ！

――訪希深、あんたのはやり過ぎなんだよ！  
やり方ってものが…

――んんっ！…お戯れはそこまでにしませんか？

瀬戸殿も ■ ■ ちゃんも我々を待っているのですから。  
訪希深の世界も”さほど悪く”ありませんでしたよ。

――…津名魅が言うんなら大丈夫だね。

じゃあそこに行ってもらおうかい。あたしは ■ ■ に説明するか  
ら瀬戸殿は頼むよ。

――解りました、鷺羽姉さん。

あと、お願いが一つ…

――ん？珍しいね？どうしたんだい？

――訪希深の世界が終わったらその…

私の世界に ■ ■ ちゃんを入りたいのです…

――まあ、裁量はあたし達に任せられてるからいいんじゃないのか  
い？

でも何でさ？

――そ、それはその時にお話しさせていただきますので！

■ ■ ちゃんによろしく伝えといてください！  
それではお先に！

――ああ…

不思議に思いつつも驚羽もその場を後にする。むくれている訪希深を置いて…

第0話・三命の頂神達の画策（後書き）

■ ■ …

読みづらい。

## 第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹（前書き）

天地無用！GXPはアニメ版の知識しかありません。  
また真備清音さんだけは登場しますのであしからず。  
このへんは独自解釈です。  
それではどうぞ。

## 第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹

第二世代艦「水鏡」のメインブリッジ。ここは今、暗い空気しか立ちこめていない。

所以は、第三聖衛艦隊司令補佐官の無期限休職命令である。

樹雷の裏の最高権力者であり、水鏡のマスターである神木瀬戸樹雷の判断は間違っていない。

実際、休職命令というのは人材流出を防ぐ一種の手段である。

ただ”無期限”という言葉が彼女の部下達の心に引っかかっているのだ。

「瀬戸様…どうにかならないのでしょうか？」

この男、平田兼光は神木家第七聖衛艦隊司令官にして「瀬戸の剣」と呼ばれる豪傑である。

それほどの逸材が、今回の判断は非の打ち所がないという事実を受け止めながらも、この空気に耐えきれず皆を代表して言った。

「だからねえ、これは決定事項なの。」

わかっているでしょ？いくら何でも今回は隠しきれない事じゃない。私だって命令したくないわこんな事。それに、津名魅様の御言葉も頂いてるわ。

まあ……確かに気持ちはわかるわよ。

結果はどうあれ水穂、林檎達を助けたのですもの……」

あっ！そこは地雷！

聞き耳を立てていた部下達は恐る恐る二人を見る。

柁木水穂、神木家第三艦隊司令官兼情報部副官にして「瀬戸の盾」

と呼ばれる聡明な女性である。  
そんな”彼女の”補佐官が自分のせいで今まさに裁かれようとしている。

否、裁かれた。

そう、これは決定事項。決して覆る事のないもの。  
休職命令だけなら良かった。いつでも会えるから。

だが、彼女そして補佐官に近い者だけが知っている彼の本当の処遇。  
三命の頂神によって異世界に彼が送られる、つまりは島流しなのだ。  
しかも”無期限”の。

心中穏やかでは無いのは当たり前だ。

それは林檎も同じであつた。

立木林檎、瀬戸配下の経理部主任にして「経理の鬼姫」と呼ばれる  
理知的な女性である。

二人とも俯いたまま何も言わない。

下唇を咥え、言葉を出すのを必死にこらえている。  
耐えるように体は小刻みに震えている。

「はあゝ。ヤダヤダ。

この重い空気をどうにか出来ないかしら？

仕事が進まないじゃない。

三日よ三日。何時まで引きずってるのよ。」

瀬戸はあきれたように扇子を広げたまま上に上げ、彼女たちを挑発する。

それでも動かない。何も言い返さない。ビクつく部下達。  
悪循環である。

流石の瀬戸もしびれを切らし扇子を力強く閉じた。  
それと同時にとてもないプレッシャーが当てられる。

「水穂ッ！林檎ッ！ふざけるんじゃないわよ！  
あんた達がそんなのでどうするの！！」

「「うつ…」」

樹雷の鬼姫ここにあり。この闘気を流せる者などここにはいない。

「大体あんた達そんなことで彼が喜ぶの！？」

まるで彼が死んだみたいじゃないか…と思いつつも言う。  
だが彼女らは未だに俯いている。

「「すみません…」」

それしか言い返せなかった。  
そしてそのままブリッジを後にする。

「待ちなさい！話はまだっ…」

…っはあ。どうすりやいってのよ。私は。  
私だって引きこもりたいわよ。でも…と思った所で秘匿通信が入る。  
彼女もブリッジを去り自室で回線を開く。白眉鷺羽だ。

「大変そうね、そっちも」

「と言うことはそちらでも？鷺羽”殿”」

「まあ…ね。」

と、苦々しく返答する鷺羽。

榎木家も同じ空気。二人とも大きいため息を吐く。

「あの子は無事に飛ばせたよ。」

不意に本来の用件を伝える。すると瀬戸は遠い目をしてつぶやくように話す。

「そうですね…早く帰って来てくれる事を願いますわ。私の為にも。」

「大丈夫。きつと立派に成長してきてくれる。私たちが育てたんだからさ。」

「では私たちも…という激励ですか？」

ふふっ…と手を口に当て上品に瀬戸は笑う。そう、それしか無いのだ。

「水穂殿と林檎殿は津名魅に任せたから、大丈夫。」

「あら、それは助かりますわ。此方も打つ手なしで困っていたのですよ。」

時に、真備清音殿は？」

「それも津名魅。あの子が打つ手は良さそうよ。」

ふっふっふっ…打って変わってマッドな笑いをする鷺羽。

それもこれも彼が一つ目の世界を終わらせてからだけど、と一言付け加えた。

瀬戸にとっては不安材料でしかないがこれも計画の為、仕方がないと相づちを打って答えた。

二人とも心なしが顔色が良い。

「それでは瀬戸殿。」

「それじゃあね、鷺羽”ちゃん”。」

二人は英気？を養い通信を切ったのであった。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹（後書き）

うん。

本編行かないなあ…

と言うより瀬戸様のキャラが難しい。

オリ主の細かい設定は存在しているのですが…  
これは小出しか、もしくは別の機会に。

## 第2話：ズレた感情（前書き）

まだまだ影の薄いオリ主…

## 第2話：ズレた感情

榎木家の一畳程度の広さの物置だったその部屋は今、ある女性の研究室と繋がっている。

この部屋は…いや、一つのスペースコロニー…

否、星々の集まりが、彼女の研究所と化している。

2012年12月25日現在、地球上でこんな技術を有しているのはただ一人。

何を隠そう、彼女は宇宙一の天才科学者、白眉鷺羽とはこの方であるッ…

てってれ〜

ムフツ、ムフフフフ…と自画自賛しているのもまた彼女ただ一人である。

そしてそれが事実なのも確かである。

彼女は今、そんな広大な研究所のとある一角へ向かっている。

そこは白眉鷺羽が認めた、最初で最後の弟子に預けた研究室である。

彼は本当に不思議な子だった。

この天才がいくら調べても、摩訶不思議の言葉しか出てこないのだ。

長神の力を持つてしてもなにも解らない。

もはや解析不能、というのは少し語弊がある。

わかっていることは”長神の力を受け付けない”という事。

つまり彼が存在している次元は巻き戻すことが出来ないのだ。

そして、彼が存在している次元はここしかない。

よって導き出せる答えは…

つと、そんな物思いに耽っている間に部屋の前に着く。

「んんっ…」

これから彼を別の次元へ飛ばすのだ。

あの事を引きずってなければいいのだけど…  
と思いつつノックを四回打つ。

案の定返事がない。

やれやれ…と首を振りつつ、しっつれいするよ〜と言いながらドアを開ける。

そこにいたのは、地球で言う眉間に指を当てた「考える人」だった。

「ひどい顔してるじゃないの、あんだ。」

怪訝な顔で鷺羽は一人の男の顔を覗く。

すると、完全に瞳孔の開いた深紅の眼差しで見つめてくる。

「私の…罰は決まりましたか…鷺羽様…」

ああ…台無しじゃないかその顔は。

鷹のような鋭い眼光。女性のように整ったその容姿。

「いつものように『マッド』とは呼んでくれないのね。  
まあいいわ。」

あんたは、まず始めに訪希深の管理する世界に行ってもらう。

「それだけでしょうか…。」

「んにゃ、それプラス訪希深と”契約”をしてもらおうよ。」

一瞬彼の肩が跳ねたような感じがした。  
そして何処からかポンツと音を立てて、可愛らしい訪希深が現れた。  
それに何も反応せず彼は尋ねる。

「して、その契約とは？」

「八つある。」

1 約束の日を地球上における敵対地球外生命体を駆逐した日と定める。

2 この日まで戦い続けなければならない。

3 この日まで力を解放してはならない。

4 この日まで決して逃げたり死んではならない。

5 人類に一人だけ自らの主を定め、この者を守護する事。

6 約束の日が訪れたとき第5の契約は破棄される。

7 これが行われた時、火星を奪還する事。

8 これが行われた時、訪希深との契約は解消される。

以上だ。

わ、我としては■ ■を送りたくないのだがなっ…

姉者がどうしてもと言うから仕方なく…」

と、頬を赤らめ自分の人差し指を付けたり離したりしている。

「あゝ あゝ ああ！」

もう！あんたはしばらく黙ってなさい！！」

本当にやつかいな子だ。

”Z”の一件以来、訪希深は妙に余所余所しくなっていけない。

「はあ、それで飲んでくれるかいな？」

「飲むも何も。」

無感情にただ従うだけ。

彼には今何を言っても変わらない。

それなら事を進めて帰ってくるのを待つのが正解だ。

「ん、じゃあ飛んでもらうよ。

訪希深、頼んだよ！」

「それでは■■行くぞー!!」

ずるずるとピクニックに行くように彼を連れて行く訪希深。

はてさて■■はどんな風に帰ってくるだろうか。

瀬戸殿にも報告しなきゃね。

マッドな笑いをしつつ一つの書類を手にとる。

そこには■■のハイパー改造計画Ver.4と書かれていた。

## 第2話：ズレた感情（後書き）

オリ主スペック

黒髪、長髪、後ろ縛り。

目は深紅、鷹のようなツリ目。

Helisingアーカード青年Verか、ウォルター少年という感じで。

このままでは恐ろしいので、細めの眼鏡を掛けてインテリっぽくなつてます。

普通に見れば美青年です。

眼鏡を掛けると目が黒く見える不思議…

体は鷺羽特製ナノマシンで廻り以上の回復力。

つまり…不老長寿？

鷺羽が出来る事は基本彼も出来ます。

スタイルは…暗躍系

つまりウォルターみたいな糸でバツンバツン裂いて、Gガンシユバルツのゲルマン忍法使って、柎木遙照樹雷みたいな武術家…。

三人を割って強化した感じです。

ちなみに2012年12月22日時点で皇家の樹のバックアップ無しで光鷹翼六枚発現させてます。

不吉な日ですね…。

まあ、その辺の能力はこの話で制限された事になってます。

また、今の訪希深はすっかりさんなので予定とちよつとずれた事をします。

そして、連れて行くという表現ですが実際はアストラル投射しています。

次でブローグ終わらせる予定です。

### 第3話・もう一つの契約（前書き）

この後の展開を考えていくと難しいです。  
これでプロローグは終わります。

### 第3話：もう一つの契約

「この場所…」

その場所は、得体の知れない植物が辺り一面に茂っている。

少し歩みを進めると、どこか懐かしい雰囲気漂う巨木が佇んでいた。

高さにして約100メートル、幅約6メートル。

彼はこの樹を知っている。でも知らない。

そんな樹。

幹の前で止まる。そして樹に触れる。

流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる

ナニカが流れ込んでくる。

目眩がする。

頭が割れそうだ。

落ちる。

落下する。

「ああ…アンタの言うとおりになったよ。」

誰に話しかけているのだろうか？

彼は闇の中を落ち続けているだけなのに。

「アンタの契約…たった一つの契約…あんな簡単な契約がこんな結果になるなんて…」

本当に地獄になった。」

彼の目には零れんばかりの涙があふれている。

「なあ、まだ終わらないのか？まだ終わらせてくれないのか？」

返事は帰ってこない。

「まだなのか…」

ナニカに納得し目をつむる。

それと同時に彼は気を失った。

### 第3話：もう一つの契約（後書き）

はいっ！

意味不明ですね！

許してください…

あと、タイトルが3rd storyになっていますが、武の三回目のループという意味ではありませんのであしからず。  
本編行きます。

## 第1話：五撰家に生まれし鬼（前書き）

パトレイバーキャラが入ります。

また、これはフィクションです。

登場するキャラクターは実在する人物とは関係ありません。

歴史も都合の良いように改変されていますので、注意してください。

9 / 19 第1話：五撰家に生まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあったので訂正。

誤：私の名前は天木<sup>アマキ</sup>一貴<sup>カズキ</sup>。 歳は3歳。

←

正：私の名前は天木<sup>アマキ</sup>一貴<sup>カズキ</sup>。 歳は2歳。

## 第1話：五摂家に産まれし鬼

目が覚めたら誰かと話していた。

話の内容は覚えていない。

でも、とても悔しくて…そんな感情だけはぼんやりと覚えている。  
そして最後にこう言うのだ。

「…に会って真に…める。…方が…しろい。」  
よく見る夢の一つだ。

曙計画の合同先行調査報告書が来ているので会社のオフィスで読んでいる。

1000枚にも及ぶ報告書を要約すればこうなる。

『F-4の基本性能は対BETAには有効であると判断出来る。しかし、我が国の資源保有量は依然低く、十分な弾薬の補給は困難であり、米国の戦術は日本のそれには適合しかねる。故に日本独自の機動性、近接戦闘に特化した戦術機の開発が急務である。』

…なんというかやる気を無くす内容だった。

そんな当たり前の報告をする暇があるなら米国の戦術機の情報をもっと多くして盗んで来て欲しい。

なんのために研究費用を投資したのかわからない。

私の名前は天木<sup>アマキ</sup>一貴<sup>カズキ</sup>。歳は2歳。

天木という苗字はあまり好きではない。

なんかこう、前世では相性が悪かったのではないかと言った類だ。  
それに本名ではない。

元々、私は崇宰家で生まれた人間だ。  
自分で言うのもなんだが、我が国では五撰家の一角でそれはもう格  
式高い名家だ。  
ではなぜそんな家から出て天木を名乗るのか。  
そんな疑問は簡単に解決される。  
私の眼を見たまえ。

深紅に染まっている。

これが一番の問題なのだ。  
そして困ったことに私は洋風の顔立ちをしていて、犬齒が普通の人  
間より尖っており、かつ生まれながらにして日本語がきちんと話せ、  
書けた。

実の母親と私はすぐさま遺伝子検査。

結果は白。純日本人だった。

五撰家でもある崇宰家に「鬼」が産まれたとなつてはこの戦時下問  
題らしい。

そうゆう訳で崇宰家の元家臣であつた天木家にお世話になることと  
なつた。

私が言える事ではないが、この天木家、私を養子として引き受けた  
”変態”である。

現天木家当主、天木重三郎アマキ ジュウザブロー、この人がその元凶。

彼は元帝国斯衛軍少将。現在は天木重工業、天木商会の代表取締役  
兼社長。

現役時代、国内国外問わず「斯衛軍一のキレ者にしてクセ者」と言  
われていた。

事の発端は習志野俘虜収容所での捕虜の扱いである。

当時の軍関係者などの反対を押し切り、故西郷寅太郎大佐を強力に支援しドイツ人捕虜を手厚く保護した。

噂では、この行為にヴィルヘルム2世はいたく感動し、亡命中であったのにも係わらず非公式ながらプール・ル・メリット勲章を贈ったとされている。（後の平和章の原案とされる事になる）

これが元でフリードリヒ・ハックラを中心としたグループと深い親交を持ち、天木重工業、天木商会の前身ドイツ科学研究所を設立。この研究所を通し日本の近代化に大きく後押しした。

余談ではあるが、ドイツ国内では日本「重三郎」という図式が一般に認知されており慕われている。

さらに、彼のこういった功績は皇帝陛下、皇武院家等のごく僅かな有力者には高く評価されている。

第二次世界大戦ではドイツとの交渉窓口は彼であり、航空機や小火器などの兵器は彼の長男を筆頭として日本に還元していた。

しかし米国の原爆に巻き込まれ長男は死亡。

こういった理由からドイツ軍人・研究者らの亡命を強力に手引きしたとされている。

敗戦後は、病弱だった彼の三男がその商才でもって会社を大きくした。

彼は独国とのパイプを生かし小火器、弾薬を中心に開発、販売。

世界シェア10%を越えるという快挙を成し遂げ、日本国内では40%は優に越える日本兵器産業の草分け的存在となった。

また長男の死亡、次男はミッドウェー海戦で死亡していたため、彼、アマキ ユウジ天木祐司が天木家当主となり、慣例として斯衛軍に技術将校として入隊した。

ただ、1968年には肺結核を患い死亡している。

又3人は妻を貰っていたものの子に恵まれず跡取りは誰一人いなかった。

故に重三郎が当主に戻り、会社の経営をしているのである。  
彼は77歳という高齢であるため、子を得る為にはいささか無理がある。

さらに言うなら彼の妻もすでにこの世には居らず、彼自身も新たな嫁を貰うつもりが無い。

なぜなら、彼は多くの武家に嫌われているからである。

武家というのは商いをしてはならないという仕来りが存在しており、またドイツとの親密さからナチスのシンパ、若しくはドイツのスパイという噂が絶えず崇宰家からも敬遠されている。

彼は退役しているとはいえ「赤」を司る斯衛である。

自分の苦勞を子にける必要は無いし、会社も別の人物に任せればいいという考えにいた。

ここで、私の存在である。

産まれながらにして鬼とされ、存在を消されようとしていたときに彼は私を引き取った。

今でも覚えている。

彼は私にこういった。

「修羅の道を歩む心意気はあるかの？」

まったくこの”じじい”0歳の餓鬼にとんでもないこと聞いて来やがった。

私は、私の運命を切り開くことを決断し「是」と答えた。

そして、武術に始まり経営学やらなんやら様々な知識を与えられたお陰で今や、じじいのバックに付き事実上会社の運営は私がやっている。

そして一つの計画を練っているのだが…

「入るぞ、坊主。」

「ノックしてから入室してくださいよ…」

物思いに耽っていた私は突然の来訪に驚きもせず眼鏡を外しながら振り返る。

この男は榊 清太郎、帝国陸軍技術軍曹。

天木重工業の技術部出身。

亡き祐司さんの親友であり一般人で唯一、彼にタメ口で話していた男だ。

戦術機が発表された後「こいつあ男のロマンだ」と訳のわからないことを口走り、天木重工業の部長のポストを蹴って帝国陸軍技術廠へ行った猛者でもある。

今回、軍から我が社に出向してもらい曙計画に行ってもらった。

「ん。」

500枚程度のまとめられた書類をぶつきらばうに渡す。

それを私が受け取ると、自分専用のマグカップに珈琲を入れてソファに座り込む。

表紙には”極秘” ”部外秘” ”転記禁止”などと真つ赤に染まっている。

題は「戦術機の管制ユニット及びシステムのリバースエンジニアリング報告」とある。

数枚めくるだけでもこの報告書の濃さが伝わってくる。

ため息をしつつ書類を閉じ机に置く。

これは直ぐに読めるような内容ではない。

「流石ですね、おじさん。」

「あのな、坊主。」

俺は仕事でそれを行っているんだ。

それにお前さんに流石だなんて言われる筋合いは無い。  
俺にとっちゃ当然の内容だ。」

だから他の連中が出来てないから……と言おうと思ったが私は3歳。  
こんな餓鬼に褒められるのは屈辱だよな。

「わかりました。お仕事ご苦労様でした。」

「それでいいんだよ。」

俺は技術部に戻ってそいつの内容説明してくるわ。」

彼はそのまま膝を強く叩き立ち上がる。

んじゃあな、とドアノブに手をかけつつ背を向けながら片手をあげて退室する。

そして、私は眼鏡をかけ直し書類に手を出すのであった。

**第1話：五摂家に生まれし鬼（後書き）**

天木一貴

天地無用！の世界での名前とは関係ありません。  
あと、彼は記憶を失ってます。

パトレイバーのおやっさん！  
いいですね〜

それでは

## 第2話：Phantom（前書き）

アウターガンダムの設定が入ります。  
松浦まさふみさんの描く女性キャラが個人的にツボです。

9 / 19 第1話：五撰家に生まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあったので訂正。

誤：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は3歳。

← 正：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は2歳。

## 第2話：Phantom

このBETAとの戦争、人類の敗北はもはや免れない状況となっている。

パレオロゴス作戦によるミンスクハイブ攻略失敗。  
それによるスルグートハイブの建設。

BETAの攻撃はもはや留まるところを知らない。

いや、もしかするとこれは戦争では無いのかもしれない。

そもそも戦争とは国家の間で行われる血を血で洗う争いだ。

我々人類は、彼奴等から未だに宣戦布告を受けていない。

ということは、彼らは我々を敵と見なしていないのではないだろうか？

とある研究者がBETAの生態をアリに例えて話をしているが、疑問点がある。

彼らは”防御”しないのだ。

あらゆる場面において”侵攻”するか”攻撃を受ける”この2点だけである。

ということは守るべきものがないのではないだろうか？

アリならば女王アリや卵を守る…まあ例え話に噛み付くのもあれだが…。

つまり、母なる存在がそこには無く、一つの機械として作業しているのではないか。

そして同じ炭素系生物である人類もまた機械として認識されていると仮定する。

ともすると、彼らは一体なんの作業をしているのだろうか？

彼らは一つ一つの星を隅々まで”占領”する。  
まるで掃除をするように。  
いや、隅々まで何かを探しているのか…。

それを確かめる術はまだ無い。

あれから3年、榊からもたらされた情報は、天木重工業の手によってその体を成そうとしている。

「完全自立型無人機システム実証試験機（案）」

またの名を「Zephyr Phantom System」という。

純粹に、BETAを殺すためだけのものだ。

これは一貴と内海が戦術機を無人で大量投入するために考案し、実験しているシステムである。

内海とは天木重工業、戦術機課課長。

といっても神出鬼没な人間で実際の所、黒崎という部下が実質的に課を動かしているようで、課長らしいことは何もしていない。

一貴は「給料分は働いている」ということで今のところは放置しているようだ。

一貴は生まれながらにして持っている知能でもって、天木グループの利益を上げ続けている。

例えば認知心理学を使用した深層心理療法を生み出し、応用として戦術機パイロットの精神安定・高揚に寄与している。

一種の催眠・洗脳であるが、これによりBETAの殺傷率が上がっており、パイロットの生存率も上がっているのも事実だ。

他にも日本の軍事組織向けに衛士強化装備の開発・生産。

さらには管制ユニットのライセンス生産も行っている。

その延長上にあるのがこのゼファーである。

この戦争は人が行う必要はないという考えの元、出来たシステムである。

「一貴や。この者が強力してくれるそうじゃ。」

重三郎が一人のブロンドヘアーの老人を連れて来た。

「初めまして、カズキ様。」

そう言つて右手を差し出し、自己紹介を始める。

何とも、怪しい雰囲気の漂う彼の名はヴァレリアン・トリファという。

彼は重三郎が助けたナチストの一人らしく、恩返しの一つとして来日したらしい。

一貴は、様はよしてくれ、彼に言つたが受け付けてくれない。

そのまま一貴は握手を受け、手早く自己紹介をした後問いかける。

「トリファ殿、今回の件は難しい事ですがそれでも？」

しかもじじい……もとい、重三郎の恩と言つても私には関係ありません。」

「ええ、構いません。」

我々の教義には友を愛せよ、とありますから。

貴方も例外ではありません。

大方、重三郎様からお話を伺っていますが、要は秘密裏にゼファーとやらの実戦試験を行いたい、という事ですね？

それと、殿は結構ですよ。」

なぜゼファアーを公開試験しないのか。  
ゼファアーシステムは人間が乗らない戦術機の為、G制限がかからない。

シュミレーション、つまりは架空空間での戦闘で改造型F-4に乗ったゼファアーはとんでもない戦果をたたき出している。

対BETA戦シュミレーションで地上支援無し、補給状態30%、BETA出現率100%でヴォールクデータをやらせたところ、ハイク内を”単機で深度約100m”侵攻した。

このデータは開発陣を驚かせ、一貴主催で盛大な宴を施設内で行った。

誰もが人類の勝利を確信した瞬間だった。

その中で内海が酔った勢いでゼファアーをMig-21と戦わせた。  
F-4に乗ったゼファアーと日本の仮想敵国機Mig-21とのキルレシオ。

その数値0：955

これは、まだ見ぬ第3世代戦術機以上の戦闘能力である。

会場は騒然。

「戦争をさせてみましょう」という内海の提案で、試しに集団戦を行わせてみたところ、敵と味方の区別が出来ておらず動くモノ全てを破壊してしまった。

BETAより酷い、この結果を見た会場は一気に通夜と化してしまった。

その後、改良してみたところ、一様はIFFを認識しているようだが”高脅威目標”を殲滅するために味方を犠牲にする箇所が見受けられ危険過ぎるのである。

また、それに伴い単機でのハイブ侵入も困難になってしまった。とは言っても、無人で戦闘参加できる事のメリットは高く、少しでもBETAの侵攻を押さえる為にはいち早くバトルプルーフしなければならぬ。

ちなみに、一貴の侵入深度はゼファーと同条件で約20m。そもそも、単機で侵入できる彼も彼で規格外だが…

閑話休題、一貴はトリファの言う教義、という言葉に少々疑問を持ちつつも話を続ける。

「では、トリファさんと。

どうやって手伝っていただけるのですか？

このゼファーは非常にデリケートな兵器なモノで、理想的な演習場所は…。

そう、戦術機がないBETAだけの場所ですね。そんな場所に送り届けて頂きたいのです。」

まあ無理でしょうが、と彼は内心想いつつ言った。

「…危険ですね。

ただ、結論から申し上げますとバルト海までなら送り届けられます。」

「もしや…あれを？」

重三郎が初めて口を開く。

「はい、潜水艦を使います。

U - b o o t X I X 型を3隻までなら用意できます。」

「貴方は正気か？」

大戦中の兵器ですよ！？

それに人員は何処から手配するのですか！？」

一貴が声を荒げながら問う。

「人員は私が集めます。

この潜水艦は我々が亡命した時に使用した船ですから。

U - b o o t   X I X 型と言いましたが外見、内部もその時とは全く異なり、緊急用の輸送船です。

ですがご安心ください。

性能、速力や静粛性どれをとっても従来のそれを上回ります。

それと、私は正気です。

どちらかというと、貴方の正気を疑いますが？」

これには言い返せない。

そもそも無理を言ったのは一貴なのだから。

だが、妙な話である。

トリファの言う事が本当ならば、亡命したナチスは膨大な資金力と技術力を未だ保持している事となる。

しかも、今回使われる船は緊急用、通常はどんな船を使っているのだ？

…ある噂を聞いたことがある。

ナチスドイツは魔術を使っていた。

ヒトラーは魔術師に操られていたに過ぎず、黒幕は別にいる。

そして、その魔術師が B E T A を呼んだと。

まさか、彼らがそれなのか？

トリファの目は真っ直ぐ一貴をとらえている。  
一貴は咳払いをしつつ眼鏡の位置を戻す。

「失礼。」

では、見返りは何を？」

それを聞いたトリファは拍子抜けした顔をし、頬を引きつりあげ突然笑い出した。

「ははっ！失礼。」

流石は天木家のお方だ。

私は初めに重三郎様の恩に報いる為と申し上げたが、無償と解釈しなかったか。

結構、結構。素晴らしい。

あの時を思い出しますよ、重三郎様。」

そう心底楽しそうに重三郎に同意を求める。

そして、私の”息子”だからな、と答えていた。

「では、一貴様、1つだけお願い事を。

私の命はもうすぐついでる事でしよう。

そこで、私の息子ヴァレリア・トリファが困った時、助けてはくれませんか？」

「わかりました。その時は全身全霊を持ってお助けいたしましょう。」

言い終わったと同時に双方ソファから立ち上がり力強く手を握り合った。

## 第2話：Phantom（後書き）

U - b o o t    X I X 型

UボートX I V 型の後継艦で補給用潜水艦で、リアルだと完成してなかった筈です。

マブラヴの世界ではナチス・ドイツ最強だったようなので、完成。彼らが乗る船は、もはや大戦中のモノではありません。

全長：99・3メートル

全幅：10・2メートル

浮上航行時：15・8 ノット

潜航時：30 ノット

主機：？？？

排水量：？？？

改造型 F - 4

F - 4 にして F - 4 にあらず。

外見は統一中華戦線    J - 8    殲撃8型です。

内部は”より人間に近い機動”が可能なように改良されています。

つまり、従来の戦術機に搭載されている、電磁伸縮炭素帯ではなく、カーボニック・アクチエーター電磁伸縮筋（通電により伸縮する形状記憶プラスチック）を使用しています。

電磁収縮筋は内海さん考案で、榊班長も整備出来ます。

管制ユニットも独自設計で、脱出機能はありません。

基本OSは内海さんだけあって”ASURA””改”ですが、一貴がつくってます。

なんだか話が見えてきましたね。

トリファさん、クサ過ぎですね。

それでは

### 第3話：遺憾の意（前書き）

一貴が壊れます。

やっとラブラブのキャラがでます。

今回は長め……？

### 第3話：遺憾の意

「ごきげんよう、天木様」

「う、ごきげんよう…」

なんで俺が…小学校にはいらねえといけねーんだよつ!!!  
と内心叫びながら、学校の昇降口の前で怒りの舞をしているのが、  
天木一貴その人である。

この学校は、斯衛関係者が入学する初等科であり、名門中の名門と  
されている。

まず、マナーの講座から始まり、茶道、華道、武道…あらゆる道を  
たたき込まれる。

しかし、彼には関係ない。

もうすでに、大人の世界に踏み込んだ一人のビジネスマンであり、  
重三郎に指南を直接受けた天木家の次期当主である。

実際、義務教育と言っても「一身上の都合」から通信制教育に移行  
できるのがこの学校である。

それをしなかったのは、じじいこと重三郎のせいである。

ことの始まりは1年前のF-4「Zephyr Phantom  
System」の試験結果だ。

「良い結果が出ぬ場合はお前を小学校へ行かす。」

「良い結果が出た場合、おじいさまには隠居して頂きましょうか。」

潜水艦内で二人の視線に火花が散る。

その様子を見ていた潜水艦内の兵士達はため息をつきつつ、試験地の情報を集め、自らの職務を全うしていた。

兵士…。

そう、彼らの姿は兵士そのものだった。

ナチス・ドイツ時代の海軍の制服。

タンカーを使つて、沖ノ鳥島の南西50km先で彼らと合流したが本当に異様だった。

我々の出迎えには全員正装をし、右手を上上げる独特の敬礼をしてきた。

「Achtung!」

「「Sieg Heil!」」

いつの間にかSS（親衛隊）の制服を着込んだトリファが短く返礼をし内部に入る。

艦の運航は大尉の階級をした者が行い、一人一人の業務が階級によって決められている。

軍隊そのものだ。

一体全体こいつらは…。

「周囲に敵影無し。」

「よし、アップトリム15度、無音浮上。僚艦にも伝える。」

浮上と同時に甲板要員緊急配置。ハッチを開き輸送ヘリ発進。」

「Jawohl! Herr Kaleun!」

目的地についたようでCICが慌ただしくなる。

ヘリだと光線級にやられると思うのだが、大丈夫らしい…

ゼファアの装備は青龍偃月刀、三国志の武将、関羽が使用していたと言われる通称青龍刀。

その形を模した、高周波ブレード。

そしてA-97突撃砲を2丁装備している。

一貫達は潜水艦に設けられたゼファア専用のコントロールルームで試験場所に着くまで待機する。

すると無線が入りゼファアを”投下”したと連絡が入った。

彼らの番である。

「全システム解放。アーマープロテクト解除。  
システムオールグリーンです。」

「さあ、やってくれ。」

起動!ゼファアファントム!」

リトアニアに1機だけ降りた戦術機のメインモニターが赤く光り立ち上がる。

装備していた青龍刀を片手で回転させながら構える。

その先には黒い津波と化したBETAが此方へ向かってきていた。

恐れもせず、臆することなく、ゼファアは彼奴等を切り裂いて行く。

その姿はまるで黄泉の国から舞い降りた関雲長その人に見えた。

ゼファアの通る道はBETAの屍が、うずたかく築かれていく。光線級が視界に入れば他のBETAを盾にして接近、殲滅。要塞級に出会えば刺身にしてしまう。

戦闘開始から僅か10分、無傷で戦い続けているゼファア。もはや、コンバットブルーフには十分な戦果を挙げ、一貴の勝利は間近だった。

重三郎の本心は”子供”に十分な青春を送って欲しいという親心から来たもので、戯れにあのような賭け事をしたわけではない。そして、本人はそんな”親心”を理解できるほど”大人”ではない。しかし、一貴は最初こそ意気揚々としていたものの徐々に顔色が悪くなる。

現状、冷静になって戦況を理解しているのは重三郎と彼のみだ。

「ゼファアを回収する。私の機体を出すぞ！」

一人の技術者が満面の笑みでそれを制する。

「坊ちゃんが行くほどの事ではありませんよ。」

「ゼファアが片付けて簡単に帰ってくれますよ。」

BETAへのキルスコアは優に”5万體”を越えており間接部分が焼け落ちるまでに猶予が無い。

「全員目を覚ませっ！！」

BETAの数が多すぎる！5分間で5万體：ヴォールク・データの3倍だぞ！

「どう考えても異常だ！」

すでに発進準備が完了していたヘリに乗り込み、ゼファアの回収地点に急行した。

そこは、異常な光景だった。

ゼファアに群がるBETA。

ヘリや一貴が近づいても殆どが反応しない。

ゼファアのみに攻撃しているのである。

パイロットは破顔しつつもHQを呼び出す。

「HQ、こちらゼファア回収班、over。」

「ゼファア回収班、こちらHQ、over。」

「HQ、こちらゼファア回収班。

break、予想よりBETAが多い。いや、多すぎる。

ポイントθ以外を焼き払ってくれ。break over。」

「ゼファア回収班、こちらHQ、了解。15分待て。out。」

15分後、回収支援の為に潜水艦からトマホーク（RGM/UGM-109D TLA M-D）が全弾発射され、周囲はクラスター爆弾により一時的にクリアになった。

それと同時に一貴は戦術機と共にヘリから降り、ゼファアの回収を開始した。

だが、BETAの攻撃はやまない。

3分も経たない内にあたりはBETAで埋め尽くされる。

一貴もそれに負けず劣らず彼奴等をさばいて行く。

まるで時が止まっているかのように。

「クロノス1、こちら回収班。」

このままでは回収不能。対象の破棄を提案する。」

一貴のコールサインは決まっていなかったが、どうやらそれがそうらしい。

ヘリは上空をホバリングし続けている。

「回収班、こちらクロノス1。」

却下する。もう一度トマホークで焼き払った後、5分間もたせる。回収が可能か？」

「不可能だ。せめて15分無ければ出来ない。」

「ならば、ゼファー本体の回収はどれくらいで出来る？」

本体。

つまりはパイロットルームのみを外し回収すると言うことである。しばしの沈黙の後通信がくる。

「こちら、回収班。」

クロノス1の機体を回収しない場合、それを含めて5分で完了する。」

「クロノス1、了解。それで構わない。」

「flash、flash、flash、こちら、HQ・All commander。」

状況は把握している。このままであれば海岸沿いの回収が望まし

い。

座標 A D - 3 5 2 3 繰り返す、A l f a - D e l t a - 3 5 2  
3を回収地点としたい。

20分後トマホークを発射する。t h a n k y o u o u t .

「H Q、こちら回収班、了解。o u t .」

「H Q、こちらクロノス1、了解。

管制班、ゼファアの誘導頼む。b r e a k o v e r .」

「こちら管制班、了解。o u t .」

結果的にはゼファアを回収することが出来た。

しかし、残念なことに改造型F - 4を2機放棄する事となってしまう  
った。

だが、一番の問題はゼファアを実戦で使うことが出来ない、と  
いうことである。

先の作戦で海岸沿いまで後退し、ゼファアのコックピットを一貴が  
引き出した。

するとB E T Aは一貴のみを狙うようになり回収どころの話では無  
くなってしまったのだ。

結局、ゼファアの内部電力を破壊する事によってB E T Aの発生数  
を減らし事なきを得た。

「Z e p h y r P h a n t o m S y s t e m」の試験結果は以

下の通りとなった。

- 1、対BETA戦における戦闘能力は、非常に強力である。
- 2、対人戦における戦闘能力も、非常に強力である。
- 3、しかし、いずれの場合においても、戦術機自体のトータルスペックがシステムに追いついていないのが現状である。
- 4、対BETA戦において、何らかの理由によりBETAを誘引している。

以上から戦闘能力に疑いの余地を挟む所はない。

しかしながら、現在の戦術機のスペックでは対BETA戦において有効な戦略立案が出来ない。

また、BETAを誘引する理由が解明されない限り、他の部隊を危険にさらす事となる。

よって当該システムは、実戦において使用することが著しく困難だと判断される。

このような判断があったため、ゼファーは修理を終えた後、改良型F-4に換装され厳重管理のもと動態保存となってしまうた。

と、思い出した一貴の怒りは激しさを増し、もはや能のような動きと化している。

地団駄を踏んでいるようなその足は一定のリズムを刻み、まるで何かを呼び出すかのような…

「貴様が天木一貴だな！」

ずびしっ！と擬音がする勢いで指を指す、凜とした女性が二人彼の前に立ちはだかった。

先頭の女性は鬼の形相で睨めつけ、もう一人は眼鏡を掛け、後ろに佇んでいる。

「何か用かつ！今日は八日かつ！！」

俺は今忙しいのだ！！」

主に怒りの表現で…

「私は五摂家の方々をお守りする赤を授かりし、月詠真那！」  
「同じく姉の月詠真耶」

堂々と名を挙げる両者。  
だが、彼は意に介さない。

「マナだが、カナだかしらねえが、俺は忙しいっていつてんだろっ  
があああ！」

一貴は自分でも何を言っているのか解っていない。

寝る間も惜しんで開発したゼファーが、使えないと言われたショックと、重三郎のかけに負けた悔しさをどのように発散するか考えている最中なのである。

しかし、真那と真耶もそんな彼の心情を意に介さず、一つの赤い字で書かれた封書を目の前に出し宣言する。

「貴様に決闘を申し込む！！」

そんな状態を見ていた野次馬達は一瞬凍り付く。

「はああああ？？？？」

馬鹿か！？このジャリ！！

この俺に果たし状を送るなんざ10年早いわ!!  
その貧相なミニマムおっぱいがあの丘を越えるまで、出直してこ  
いっ!!

話はそれからだ!!」

そして、彼の発言を聞いた真那は顔を真っ赤にし反論する。

「なにがミニマムおっぱいじゃあ!この白人野郎!!  
ヤンキー魂見せてみるってんだ!!  
しかも、てめえもジャリだろうが!!この餓鬼っ!!」

「んだと、このアマあ!!」

俺は白人じゃねえ!体質なんだよ、阿呆!  
嘆きの壁のおっぱいがしゃべるんじゃないよ!!」

「おっぱいおっぱいと!!この、下衆め!」

「はあ?おっぱいの素晴らしさが解らんとはな!  
はっ!お前は一生おぼこだ!!」

「なっなんだと!」

「やゝいやゝい、お・ぼ・こ!」

双方共に顔面が付きそうなくらいガンを飛ばしている。  
ため息を付きつつ真耶が間に入る。

「天木一貴。我らの果たし状、確かに渡したからな。」

ちよっと真耶…と真那は抗議しているがずるずると引っ張っていく。

行き場のない怒りを抱えながら、一貴は果たし状を受け取りその場を後にするのであった。

### 第3話：遺憾の意（後書き）

マナさんブチ切れですね。

以降マナ、マヤはカタカナ表記にします。

なんで果たし状？？次回にその説明をします。

青龍刀：薙刀にしようかと迷いましたがJ-8なんで。

なぜ殲撃8型なのか、それはラウンドモニターがカッコイイから！！  
それだけの理由です。

他の機体は銃を撃ちますって感じで、あまり好きじゃありません。

また、日本刀よりも槍の方が強いと思いますし・・・

これは筆者の思い込みです。

ヘリはナチスの新兵器で一貴達もその構造について理解していません。

中型ヘリで戦術機1機乗せられるスペースがあります。

それ以上は不明です。

筆者は美乳が好きです。

それでは

#### 第4話：養父の気持ち（前書き）

早めの更新です。

養父と書いてオヤジと読みます。

今回はじじい中心です。

それではどうぞ。

#### 第4話：養父の気持ち

校門をくぐると黒塗りのセダンが6台止まっており、周囲には強面の人間が立ち周辺を警戒している。

一貴を見つけると同時に彼を囲み車まで先導する。

「一貴様、お帰りなさいませ。」

と初老の男性がドアを開け頭を下げる。

「ご苦労。」

そう言つて車内に入り車が発進する。

ふうつ…とため息を付き隣を見ると重三郎がいた。

「げっ！じ…」

「じ？」

「お、おじいさま、居るならいると言つてください。  
びつくりしましたよ。」

「ほっほっほ。学校にいるお主にどう伝えるのじゃ？  
それよりも、いつもより車が多いことに気づかなかったのかの？」

それは…失念していた。

果たし状の事ばかり考えていたのだ。

なぜなら、一貴は初等科に入って初めて私的な会話を果たしたのが  
月詠マナ、カナだったから。

入学当初からあらゆる科目でトップクラスだったこと、五撰家の一部は彼の正体を知っている事、肌が白く欧米風の顔立ちをしている事：等々が災いして、彼の周りに同世代で話しかけてくる子など皆無だった。

しかも、”あの”重三郎の御曹司ともなれば風当たりも強い。

正直に言うとなんない形であれ、話しかけてくれた事に彼は嬉しく感じていた。

「いえ…その…」

と、もじもじと手に持っている封書を隠そうとする。  
だが、重三郎は知っていた。

「ほっほっ。果たし状か。儂もよくやられたもんじゃ。」

「は！？」

なんで知っているんだと言わんばかりの顔で重三郎を見る。

「どれ。見せてみよ。」

一貴が惚けている間に手元から封書を奪ってしまふ。  
手をバタバタさせて奪い返そうとするが身体の差でとれない。

「なににに。」

『我が家、月詠家は代々五撰家を守護する家系なり。』

天木一貴殿は紅蓮中将に認められ、次期煌武院家当主の護衛の推薦を受けていると聞いた。

一貴殿は天木重三郎様の実子ではないと聞く。

そのような者が五摂家を守護することはまかり成らん。

我ら、月詠マヤ、マナは貴殿のような得体の知れぬ者に護衛が務まるとは考えられぬ。

故に、貴殿に決闘を申し込む。

明日の放課後、道場にて待つ。』

…とんだ因縁をつけられたものじゃの。」

それを聞いた一貴は舌打ちをし、ぼそぼそと何かを言い出した。

「あの糞アマあ…俺は別に護衛なんざやりたくないわ！」

「ほっ！？なんか言ったかの？」

「い、いえ。別に…」

ニタニタと笑いながら一貴を見る重三郎も内心喜んでいた。

彼の現状を知っていたし、何よりも心配だった。

普段自分の感情を押し殺して過ごしていた一貴は誰に対しても敬語だった。

それが崩れた喋り方をしている。

本当に嬉しかった。

「お主はどうするつもりかの？」

お主の実力ならば簡単に勝てるじゃろ？」

「まあ、でも…」

そうこうしている内に家に着く。

一貴はぶつぶつと言いながら家に入って行く。

重三郎はそのまま紅蓮 醍三郎のもとへ車を走らせた。

紅蓮 醍三郎。

無現鬼道流の師範代で帝国斯衛軍中將の階級を司る者である。

次期斯衛軍大將とも言われており優秀な人間である。

武術においても人並み外れた能力を持ち合わせた人物だ。

しかし、武術の点で言えば重三郎に勝った事はない。

樹雷式武術。

天木家のみに伝わる武術であり、この世で扱えるのは重三郎と一貴、二人しかない。

一貴と紅蓮は三度手合わせをしているが、その内二戦は引き分け、一戦は一貴の負けという結果である。

年齢を鑑みるにそれだけでも一貴の異常さが理解できるだろう。

ちなみに、紅蓮は重三郎以外には負けたことがない。

紅蓮宅に車が着くと軍服姿の醍三郎が出迎えた。

「お久しぶりです、重三郎様」

「うむ、久しいの、息災か？」

「御陰様でございます。そちらもお元気そうで何よりです。

ここではあれなので、どうぞ中へ」

門を通され客間へと移る。

「して、今日はどういったご用件で。」

そう、急な来訪で紅蓮も驚いていた。

普段の重三郎なら3日前には連絡が来る。

それが今回は険しい声色で電話がかかってきた。  
当の本人は気が気ではない。

「うむ…その事なんだが…」

ゴクリ…紅蓮は汗を垂らしながら言葉を待つ。

「家の一貴に…果たし状が届いてしまったのじゃ…！」

儂はもう、心配で心配で。

もし怪我をしてしまったらどうしようとか、相手を殺してしまっ  
たらどう処理しようか…

もう！どうすればいいのか解らん…！」

紅蓮は後ろにひっくり返っていた。

「ほっ！…どうしたのじゃ？」

「あ、いえ…」

心配して損した、という顔をしつつ話を続ける。

「誰からの果たし状なのですか？」

「それが、月詠の娘子のようなんじゃない。」

「は？…どうしてまた？」

「ほおゝ知らんと申すか。」

目を細くし、ドスのきいた声で紅蓮を睨む。

紅蓮は冷や汗をかき、しかし、冷静に考える。

だが思い当たる節がない。

紅蓮は首を横に振って答える。

「そうか。」

主は儂の息子を次期煌武院家当主の護衛に推薦していると聞いたが？」

「それは…現当主との酒の席の話で良い男がいる、という話をしたまでです。」

と、否定的な立場を示した。

どうやら食い違いがあったらしい。

すると紅蓮はハツつとした顔となり恐る恐る問うてみた。

「まさか、月詠はそれで…」

「そのようじゃの。」

「も、申し訳ありません!!」

真つ青な顔になった紅蓮は土下座を決め込んだ。

勘違いをした張本人ではないものの、この事態を招いた事の一因は自分にあつたと思つたらしい。

だが哀れな紅蓮、重三郎の思惑通りとなつてしまった。目が光っている。

「うん。まあ許さんでもない。  
ただ、とある約束をして貰いたい。」

土下座をしている紅蓮からは彼の顔は見えない。

「して、約束とは？」

「うむ。」

一貴はとても大事な子じゃ。

それは儂にとっても、五摂家にとっても、日本にとっても、  
だからの、紅蓮。

息子が、本当の息子になった時、支えてやってくれんかの。  
あの子には敵が多すぎる。

すまん。このとおりじゃ。」

重三郎も土下座をした。

紅蓮は何も知らない。彼の素性、経歴を。

彼の言っている意味はわからない。

だが、その雰囲気は有無を言わせない迫力に満ちていた。

「重三郎様！おやめください！」

当然慌てふためく。

「いや、受諾して貰うまでは上げられん。」

「お受けしますのでどうかお上げください！」

その言葉を聞いた重三郎は安心した面持ちで顔を上げた。

「よろしく頼むぞ。紅蓮。」

「はっ、御意に。」

「よしっ！」

今日は儂が酒をおごろう！

行くぞ紅蓮！」

先ほどの雰囲気とは打って変わって朗らかな調子で紅蓮を誘う。

「まだ5時ですよ!？」

それに決闘はどうするのですか？」

「いいんじゃない！その件は一貴がどうにかするでの！  
行くぞ!！」

と無理矢理彼を引っ張っていく。

紅蓮はまだ知らない。

これが紅蓮と重三郎の最後の会話となることを…

#### 第4話：養父の気持ち（後書き）

じじい＝クソババアです。

瀬戸の再来のつもりで書いているのですが味が出ませんね…

樹雷式武術、なんでマブラヴの世界に！？

強いです、めっちゃ強いです。

だって宇宙一ですから。

下手したらBETA切れます。

マジで。

それでは。

## 第5話・修羅の道（前書き）

マヤとマナのキャラが難しいですね…

## 第5話：修羅の道

放課後の道場。

そこには腕組みをし、人差し指をイライラしながら動かしているマナと、ジッと時計を見つめているマヤがいた。

彼女らがここに着き30分が経過したところでマナはキレた。

「遅い！！」

あのオカマ野郎、逃げ出したんじゃないだろうな！！」

比較的冷静なマヤは震える声で諭す。

「そんな事はないだろう…まさか、な…」

オカマ野郎…これは彼に嫉妬した人間がよく使う言葉である。

一貴の顔や肌は非常に美しい。

見るものを魅了し酔わせる不思議な力がある。

しかも、それを感じるのに男女の関係は無い。

普段、彼は眼鏡を掛けておりその素顔を確認した者は誰もいない。

もし仮に、眼鏡を取ったら”とんでもない事”になるといのが定説だ。

当の本人はその事を理解していない。

いや、理解をしているが彼らの定説とは違う意味で、だ。

故に彼の周りにいる”女性”は基本的に不戦の条約を結び、彼が話しかけてこない限り接触を持たない。

そうゆう事情もあり男性陣には、とことん嫌われている。

そんな好き勝手な妄想をされている本人は、道場の外で様子をうかがっていた・

「はあ…、覚悟を決めようか。」

そう呟いて戸を開く。

それに気づいたマヤは目をこれでもかと開き睨みつけた。

「貴様！！何時だと思っている！」

一貴はため息をするのを堪えて社交スマイルをした。

「月詠マナ、マヤさんお久しぶりです。」

いや、少しばかり用があったもので…」

「御託を並べんでも良い…始めるぞ。」

マヤは懷から真剣を取り出す。

しかし、一貴は表情を変えずニコニコとしている。

「これはこれは、恐ろしい。」

いえね、刀を交えずともお話をしようと思ひましてね。」

「…その必要は…ないっ！！」

2人は短刀を逆さに持ち、つま先に力を入れ同時に斬りかかる。

その太刀筋、流石は月詠家、見事なものだった。

時間差で一貴の急所を突いて来る。

目。

首。

脇。

手首。

心臓。

腹。

金的。

ありとあらゆる場所を的確に、しかし、高速に。  
常人であれば確実に100回死んでいる。

だが、彼は樹雷式武術を極めし者。

”そんな”攻撃は見切られ、紙一重の所で全て躲していく。

月詠達の息が上がり始めたところで後ろへ跳躍する。

そして、未だ笑顔を絶やさず言葉を繋げる。

「名乗りも上げず斬りかかるとは、穏やかではありませんね。

ここは穏便にお話を…」

「ば、か、なっ…」

ハアハア、何故だっ…」

何故息も上がらず汗もかいていない？

そう聞きたいようだが、正直彼女らは酸欠でホワイトアウトしかかっている。

「あのですね…」

一貴は少し困ったような顔で、人差し指で頭をかく。

「私はその件については何も知らないですし、そもそも護衛なんて

興味がないのですよ。

ですから、その件は私の方から正式に辞退させて貰うつもりなのですが。」

そう、彼には関係がない。

彼は、今は天木の姓を名乗っているが元は五摂家の一角、崇宰の出身だ。

彼にとってはどうでも良い話で、本来は守られる側なのである。しかし、その言葉が不味かった。

「っ！貴様あ！

赤を司る斯衛が護衛をどうでも良いだと！？

斯衛の誉れを何だと心得るか！

まさかとは思ったが、貴様、外人か！？

ならばここで、死にさらせっ！！」

先の発言にはマナもキレさせた。

彼女たちにとっては斯衛の任務こそが生き甲斐であり名誉である。それを蔑ろにさせることはこの世で一番許し難いことだ。

息が切れているのにも係わらず2人とも突きを入れてくる。

だが、一貴にとっても”外人”という言葉は唯一のコンプレックスであり逆鱗である。

2人の突きを交互に脇で挟み一時的に拘束する。

「ほお、外人ですか…

はははは…私は真正正銘日本人ですが何か？」

そう言うのと彼の額には青筋が立ち、ドスのきいた声を出す。

「クククッ…」

そう、そもそも、お前らが喧嘩を売ってきたんだよね？

ああ、そうだった。なら遠慮なんていらねえよなあ？

なあマヤ、マナ？」

彼の顔は既に穏やかなものではなく、鷹のような目つきに変わり、口元は張り裂けそうな程に上がり、鋭利な犬歯が強力に自己主張し、おぞましい笑みを浮かべている。

黒く澱んだ空気が周囲を包んでいく。

そして、彼女達の手首をつかみ上げ一気に力を込める。

うめき声を上げるマヤ、マナ。

一貫の放つ闘気に当てられ脚や歯、腕は小刻みに震えている。

彼女らの気力は完全に削がれ、持っていた懐刀は手から滑り落ち畳に突き刺った。

「そのような力量で私に勝負を挑もうとは、片腹痛いわ。」

そのまま彼女達を壁へと叩きつけた。

間一髪で受け身を取り辛うじて意識は保っている。

「くっくっ…」

どうしようもない者を相手にしている。

それを理解したが、時は既に遅し。

勝負を持ちかけたのはこちら側なのだ。

彼女らは、最後の力を振り絞って殴りかかったが、勝負はもう既についている。

易々と避けられ、逆に腹部を強打される。

「ふん、狗め。」

所詮、狗では私を倒せない。

だがその根性だけは認め、生かしてやろう。

さらばだ、月詠マナ、マヤ。」

その言葉を聞いて彼女達の意識は途絶えた。

「ふう……」

ため息をついて我に返る。

一貫は、これだけの事をすればもう立ち向かってくることは無いだろう、と内心思いつつ気絶している彼女達を見る。

目立った外傷は無い。

美しい女性なのだから傷でもついたら不味いという彼なりの最大限の配慮だった。

「20分もすれば目も覚めるだろうか？」

独り言を言いつつ自分の上着を脱ぎ彼女達にそっとかけ、道場を出た。

すると、やはりというか、何というか重三郎が佇んでいた。

「済んだかの？」

優しく語りかける。

「どうせ、最初から見えていたのでしょうか？」

その顔はあきれた表情、悲しみの表情、様々な感情がいり乱れたものだった。

今回の件でまたつまらない日常へと戻っていく。

決闘を受ける前から覚悟していたことではあるが、やはり悲しい。

そして、その表情を読み取られないように、迎えの車を待たしている方へ歩く。

その気持ちを重三郎は知りつつも彼を呼び止める。

「次期煌武院家当主の護衛は受けるのかの？」

歩みを止め、少しばかり考えるそぶりをした後答えた。

「私は赤を司る斯衛ですから。」

「そうか…。その旨、煌武院家に伝えておく。」

「他の五摂家は黙っていないと思いますか？」

「ほっほっほ、大丈夫じゃ。」

お主の修羅道は、まだまだ始まったばかりじゃ。

ここで歩みを止める訳では無かるうに。」

それもそうですね…と小さく呟いてその場を後にした。

## 第5話：修羅の道（後書き）

フルボッコ…かな？

一貴はひとりぼっちのままです。

でも多くの大人達が彼を見守ってくれています。

そうゆう事に気づくのは何時だって遅いものですよね。

ここで、一貴の設定を少々いじります。

眼鏡を掛けているとき、黒目に見えるというのはそのままです。

ですが、眼鏡着用時はウォルター少年、青年。

眼鏡を外したときはアーカードと言った具合に変更します。

凶悪さの演出です。

それでは

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4268w/>

---

Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

2011年10月3日18時39分発行